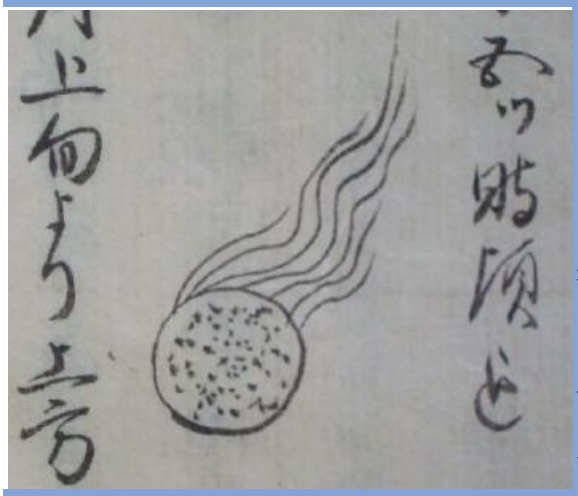
第 3 回　上空に現れる謎の物体

古文書の調査をしていると、ほとんど文字ばかりの中に、時おり面白い挿絵を見かけることがあります。写真などのない時代ですから、文字だけでは伝えられないことを、絵に描いて残すこともありました。

先日も大庭公民館で調査をしていましたら、地元の方が寄贈された史料の中に面白いものを見つけました。ページをめくっていくと、つぶつぶのあるボールから毛が生えたような挿絵が。



いったいこれはどんな古文書なのでしょう。題名は『太平吉凶記』。

天保 7 年(1836)～明治 8 年(1875)にわたる世の中の出来事や風聞を、大庭村の住人が記したものです。

日記のような即時的な記録ではなく、後にまとめて記したと思われます。内容は政情・気象・飢饉・疫病・物価・事件など様々で、後半部分は長州征討から明治維新にいたる政治的情勢が詳しく記されています。松江住民の目から見た記録ということで、珍しい史料といえるでしょう。

謎の挿絵と共に記されていたのは、安政 5 年(1858)夏、「奇麗なる皇(星)西ノ方に現れ、夕方六ツ時より五ツ時頃迄(夜 6 時～8 時頃)」と、彗星と思われる物体が上空に現れた様子でした。筆者が直接見たものなのか、伝え聞いた情報をもとに描いたイメージ図なのか、面白いところです。

確かにこの年、彗星が地球に接近し、日本各地でも目撃されていたようです。その年の 7 月には「上方辺にてコロリ(コレラ)という病流行するという風聞」がありました。諸国では死者幾万人、やがて美保関の船人にも伝染し、松江でも一日に 300 人くらい死亡していたが、大庭村は無事であった、ということです。

このほかに、例えば天保 7 年(1836)は「諸国大凶年、春より風雨あらくして、とかく寒気退かず、夏にいたりても風雨やむ事なく、冷々として諸人袷(あわせ)重ね着して農業いたし…」と冷夏だった様子が記され、また嘉永 6 年(1853)の大庭村は大かんばつで、農業用水や飲料水も尽きる程であったが、能義・仁多・飯石・神門郡は用水沢山にて豊作だった、など。

現在でも異常気象や伝染病には翻弄されますが、江戸時代の人々への影響は甚大であったことでしょう。

(平成 22 年 12 月 1 日　文化財課史料編纂室　和田美幸)